

控室

パンドラの箱

【**紆**】

余曲折とはこういう時に使う言葉なのかと思う

ほど曲折を経たあげく、統合庁舎の建設位置が白紙に戻った。一方で住民の地域感情や議会内部に、取り返しのつかない亀裂と爪あとを残してしまった。

門脇市長はその責任を議会に転嫁しようと必死だが、そもそも議会の責任を問える資格があるのだろうか。自らが委嘱した「みんなの庁舎検討委員会」（木村一裕委員長・都市工学・秋田大学教授）が答申した仙北市統合庁舎は「羽根ヶ台付近が適地」とする案を同委員会や議会に対してすら何の相談も方向性を諮るでも無く、独善的に答申を反

古にし、「角館病院跡地案」を市当局案として議会にゴリ押しした事によって、パンドラの箱が開いてしまった。

それまで議員の誰一人「羽根ヶ台付近案」に異論を唱える者も無く、答申案はどの角度から見ても妙案とする意見が多かったが、この事によって議会内部は暗雲が一気に天空を覆う様な空気になった。

呼応するように住民の地域感情や対立感情に火がついた。その後は当局も庁舎建設特別委員会も見苦しい程に迷走、逡巡した9月定例会の最終日の採決で角館駅前案は三分の二どころか賛成9反対10と過半数にも満たない形で否決された。反対の10名の殆どが羽根ヶ台案を主唱する面々であった事を勘案すれば、これまでの無用の混乱と対立は果して何だったのか、特に行政は薄氷を履む思いで取り扱うべき住民の対立感情にいたずらに深く亀裂と、傷をつけてしまった。その原因と責任は何処

にあるのだろうか。議員の多くが出身地区を背景にして、水と油の様に分離した挙句、歪んだ私情や私怨がビンの底の澱の様に沈殿してしまった。今後市政と言うビンが揺れるたびにこの澱が市政の濁りとして作用する事は無いだろうか。今後の市政と議会のあり方や議論のあり方に反省点を反映させて行くためにも、しっかりと検証して行かなければならないだろう。早くこのパンドラの箱に蓋をしなれば市民の市政に対する希望すら失せてしまうのではないか。

（阿部則比古記）



編集後記

9月定例会が終了した。本庁舎の位置を変更する条例の一部を改正する条例案が市から提案され、反対多数で否決された。庁舎建設は多額の資金を必要とするため建設を計画している市町村は建設のための基金を積み立て、自治体内の各年齢層や各種団体からの代表者や学識経験者等で構成される審議会の審議を経て答申を受け建設へと進む。本市においても建設は合併時からの懸案であったが、建設のための基金の積み立て等はしてこなかった。前市長も建設を模索していたが果たせず、門脇市長も就任時は選挙公約等により庁舎建設の議論を凍結していたが、その後市内各団体からの推薦や応募者、学識経験者等からなる「みんなの庁舎検討委員会」を立ち上げ協議の後、庁舎についての答申を受けた。その後、職員による庁舎内の検討会や議会による検討会等が行われたが建設候補地を特定するには至らなかった。しかし、市は建設に至るまでには各種許可をクリアしなければならず、長い年月を要するとの説明をしているにもかかわらず、合併特例債の有効期限が差し迫ってから提案したことが悔やまれる。

（門脇民夫記）